

第7回「泉大津市オリアム随筆賞」

【優秀賞】

母さんが着るよ

鹿住敏子・埼玉県

衣替えの季節。衣装ケースを押し入れから取り出す。半透明の蓋越しに、息子のお気に入りだったトレーナーが見えただけで、続けられなくなってしまった昨年六月。

油断してしまった。ここにこんなにも生々しい息子の息遣いがあったとは。

行年三十二歳。四歳で発症した小児がんの、長い闘病を経ての旅立ちだった。これ以上はがんばれないくらい、がんばって生きてくれた。後に残されたたくさんの思い出の品々。少しずつ、また、ある時はいっきに片づけてきたのに。

衣装ケースの中は生前のままだった。亡くなって一年目の昨年は、まったく手をつけることができずに、そのままあわてて蓋をした。

息子が身に着けていた洋服から、さまざまな姿がよみがえる。

「このボーダーのシャツはあの時に着ていたな」とか「このトレーナーは着心地が良かったのかこんなにヨレヨレになるまで着ていたんだな」とか。洋服の存在をこんなに深く意識したのは初めてだ。

抗がん剤や放射線の副作用で、少しずつ体力が落ちていく。皮膚も弱くなり、衣類にもとても気をつけた。化繊とかの肌に合わない物を身に着けると、擦れて赤くかぶれてしまう。筋肉も落ちてしまった中では、洋服を着たり脱いだりもひと仕事だ。ぶかぶかではない程度のゆるみがあつて、体が楽に動かせるもの。腕の曲げ伸ばしが十分にできなくなってからは、袖を通す時に、生地伸縮性も大切になった。靴下は、履かせる時に足の指がひっかからないように、編み込み模様の糸が裏側に残っていない物。脆くなってしまった骨は、そんなささいなことでも骨折してしまったりするから。冬などに重ね着をする際には、重くなりすぎず、なおかつ暖かい物、などなど。

衣類売り場での、洋服を吟味する時間も、おのずと長くなる。それまでの、まず、値段を見て決める買い方はやめた。元気な時ならそこまでこだわることはないかもしれない。しかし、体温調整もままならなくなってしまった体には、毎日の衣類の調整は体調に直結してしまう。

そうやって、軽くて肌ざわりがよくて着心地が良さそうな衣類が増えていった。

長い期間、息子の衣類を丁寧を選んでいるうちに、自分の衣類の選び方も変わった。

安い物がすべて悪いというわけではないが、しっかりした素材で丁寧に作られたものは、それなりの価格になるという、当たり前前にことに気が付いた。それでも、良い物を買った後悔はしたことがない。

自分の洋服も丁寧に選んでみた。何度洗濯しても、素材も柔らかいまま、形崩れしなくて着心地の良い物。特に、寝る時のパジャマの素材などは寝心地を大きく左右する。自分の体で実感してみて、改めて納得する。息子にも同じような物を探す。そうすると、先ず目が行くのは品質のタグだ。それを繰り返している間に、素材の割合から着心地の想像ができるようになる。

冬であれば、レーヨンやウールが入っている物を選び、夏には綿素材の物を選ぶ。

今にして思えば、そうやって息子のために何かしてあげられる時間が楽しかったのだ。

食材を吟味して選ぶように、衣類も吟味して選ぶ。そんな習慣がついたのは、デリケートな体の、息子と共に生きてきたからこそだ。

着てくれる人を失ってしまった、息子の洋服たち。寝具の綿毛布もしかり。クリーニングに出すのも息子のぬくもりが消えてしまいそう迷っていた。

すると「自分たちが使った方がいいんだよ」と言っ、主人は息子が最後までくるまれていた毛布を自分で使いはじめた。そうやって息子を感じたいのだろうことは、よく理解できた。

そうかもしれない。昔から「形見分け」という慣習があるのもそんなところからきたのかと思ったりする。

「ならば、息子の洋服は私が着よう」

幼い頃からの厳しい治療の影響で、身長は小柄なままだった。主人には着ることができなくても、私なら大丈夫だ。

まずは伸縮性のあるズボンを履いてみる。ちょうどいい。いや、本音を言えば、少しウエストがきつめかも。次に息子のお気に入りだった、紺と白のボーダーのトレーナーを着てみる。これは、本当にピツタリだ。暖かくて柔らかい。息子と一緒にいるみたいだ。

もう、涙はとまった。これからは、衣替えの季節も大丈夫だ。息子が残してくれた形見の洋服を、大切に身に着けて生きていく。

「太りすぎると着られなくなってしまうよ、お母さん」という息子の声まで聞こえてきそうな気がする。

いや、そんなことを言うのは主人の声だ。